



# 町民文芸

## 只見短歌会

令和三年四月詠草

地震にて昂る夜半たかぶに一人居は二階に逃げしも眠れず過よわごす  
馬場 八智

友からのコロナ三密電話には今の元氣を受話器に伝ふ  
関谷登美子

物探すに手間どる我へ教ひたげに孫は笑顔で一点見つむ  
目黒 富子

古い母に一人の遊び見付けよと言ひたる事が我が身となりぬ  
渡部ゆき子

暖かき春の日続き石楠花の今を盛りと咲き誇りをり  
新国由紀子

豪雪の年になれども日が差せば雪解け早く草花芽吹く  
渡部ヨリ子

塩分を多目に控へ出しくるるわれに合はせし料理に感謝  
新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

四月定例会

お絵かきをせがまれなざる春日和  
春の日や杖忘れてる散歩道  
都

葉桜や友の返信なきままに  
ふきのとう病みてふる里恋う友に  
弘子

水やりし菜の花咲きぬ鍋の中  
考古の地列島最後の桜かな  
真理子

雪が舞い輝くさまが楽しげに  
堅雪や田んぼの上の一人旅  
睦子

ざんざんと胸にとどろく雪解かな  
なにゆきに生きて過ぎたる夕ざくら  
恒夫

新聞の見出しをひろう目借時  
春の夜の文字をはなれし目をとじて  
礼

母の日や母より貰う事多く  
下萌や作業日誌は箇条書  
一穂

転校児不安のよぎる初桜  
花時や子に追いつけぬ母ありて  
修一

みな底の乱れを拾い花笥  
満作の花紛れ込み柴の束  
幸生